

< 紹介 >

外国のアナキスト・グループ 3

『フリーダム』の過去と現在
はしもと よしはる

日本の革命的アナキスト同志へ ケン・ノブ
小 溝 光・訳

中南米紀行 ベネズエラ・アルゼンチン・チリ
山 本 安 屯

『フリーダム』紙

その過去と現在

はしもと よしはる

英国の『フリーダム』の活動を知ったのは、私が読んだ本『バ
タイン・オブ・アナキー』の扉に記載されていた住所によって
であった。早速連絡してサンプルを送ってもらい、週刊新聞『フ
リーダム』紙を読んだ。六七年の頃であつたろうか。以来私はア
ナキズムでやっている。当時、フリーダムからは週刊紙の他に月
刊三〇頁ぐらい、A5版で『アナキー』もでていた。両方を郵
送してもらう一年の購読料は六千円なにかしてあった。記事内容
は新聞では英国各地の活動、グループの意見、行動報告があり、私
は八坐りこみV八工場占拠V八空家占拠V等の実際を知ることが
できたし、学園闘争の時はダニエル・コン・バンディのインタビ
ュー記事もみた。これは『僕はメガホンだ』に記している。月刊
『アナキー』では先頃亡くなったポール・グッドマンのエッセイ、
G・ウッドコックのエッセイ等におめにかかったし、英国の北洋
漁場の実況は例のハタラ戦争V以前に一端を知ることができた。
私個人に限って言えば、更に『アナキー』百号記念で八アナキ

ズムに就いてVと題されたN・ウォーターの一文を『今日のアナキズム』として、パンフに纏んでもいる。また『フリーダム』を通じてわが日本にアナキスト活動があるのを知られ、先のアナ連機関紙『自由連合』を回送され、牛込山伏町に連絡を取った。これは余りほめられた話ではないが、本だから仕方がない。現在でもわがアナキスト運動が生活者の場まで届いているとは思えない。けれどアナキズムでやろうとする人が、何らかの契機をつかんで寄り添ってくるのも事実である。その場合、恒常的な運動体がないと言うのは致命的である。フリーダムでは古本・新本を売っている。例えばヴォーリンの『知られざる革命』の英訳とか、米国の出版社が七〇・七一年にリプリントしたクロボトキンの本とか、ベルクマンの『アナキストコミュニティズム』、アヴリッチ著の『スペイン革命』、『ロシアのアナキスト達』を宣伝している。私はそれから推定してフリーダム社はかなり活発な活動母体だろうと思ひ、ヨーロッパ訪問者に訊ねてみたが、大体の答は「おばあさんが一人いただけだ」とか「移転中でみられなかった」というのであった。だから実情はつかめない。ただ編集者は質問に素早く答へられるし、社友の人達も運動に熱心である。ウォルフ女史は戦争抵抗者インターの一員で本年四月九八才で亡くなったが、彼女は終始エアグラムで便よりを呉れ、何かと励ましを受けた。つまりアナキストとして自覚した人びとがフリーダム社には集っているとしたか考えようがないのだ。むしろ内部的には一枚岩の団結を誇るような整然とした団体という訳ではない。事実、一昨年には『アナキー』が別のグループから出るようになり、フリーダム社は先にあげた週刊紙『フリーダム』だけを守っている。こ

れはアナキズムの在り方として、確執、意見の差異、無知から招来されたもので、必しも当事者だけが責められるものではないだろう。アナキストといえど、個人的な榮譽心、うぬぼれ、我こそは……のエゴイズム、それから、戦術的な誤り等を犯さないですますことはできない。私達は天使ではないからである。客観的にそうした誤りを計る物差しとして、私は分派していった人達の去就をみると、その人達の発行物の永続性とか行動を注視することになっている。幸い、英国では死者を出すような内ゲバは起きていない。

次ぎに『アナキズム』編集子の求めに応じて、フリーダムの過去につき、現在の編集員による一文がきたから訳しておく。筆者はジャック・ロビンソンで、私が訊ねた『アナキー』誌の分派活動から答えている。

先づ、『アナキー』での論文につき、意見の差異を論じようとは思はない。それは存在するし、同志達が私について事実を曲げているからである（この意味はロビンソンが『怒りの集団』をテロ挑発集団として非難したことを指す——筆者注）。むしろ多くの点で意見は異なるが『フリーダム』は種々の意見を前面に押出すのであって、『フリーダム』が平和主義者だというのは本当ではない。たまたま『怒りの集団』が採用している戦術を執らないというのが違うところである。またアナキストとしての我々はトロツキスト、毛沢東主義者、国民的自由主義傾向を拒否するものである。

『フリーダム』は一八八六年に創出された。その出版物は、幾

年かは別な題名で出たこともあるが、これまで中止されたことはない。当時英国に流通していたP・クロボトキンと前フェビアン社会主義者シャルロッテ・ウイルソンが作ったのである。初期のパンフには、一九一〇年に処刑された日本のアナキスト社会主義者を扱ったものもある。

一九一四年、第一次ヨーロッパ戦争（第一次世界大戦）でP・クロボトキンは戦争を支持して、『フリーダム』の編集局を去った。トム・キール、リリアン・ウォルフその他が後を継ぎ、一九二六年までつづいた。戦争中、新聞は当局から襲われ、トム・キールとウォルフ女史は入獄した。一九二四年頃、月刊紙だった新聞の発行所はロンドンからアナキストのコロニーがあるグロチェスター州へ移った。

一九二七年新聞は一時的にでなくなったが、『フリーダムブレチン』として継続し、第二のグループが別の『フリーダム』を出した。一時は二つの『フリーダム』が共存したのである。

スペイン内戦の勃発で『ワールド』誌がアナキストの視点を掲載した。これにはヴァノン・リチャード、マリー・ルイズ・ヴェルネリー（父のカミロー・ヴェルネリーはバルセロナでメーデー当日、共産主義者に殺害された）が寄り、寄稿者ではH・リード、エマ・ゴールドマン（彼女は英国で講演してスペインへの寄金を集めた）エーゼル・マニンがいた。

第二次世界大戦（一九三九年）にあたって、『ウォーコメンタリ』誌が先の『スペイン・アンド・ザ・ワールド』誌に代り、ヴァノン・リチャード、マリー・ルイズ・ヴェルネリー、フィリップ・サンソン、ジョン・ヒュートン、G・ウッドコック、フレードリ

ック・ロリン、マット・キャヴァナ、ジョン・オルディ等が編集してブームを呼んだ。一九四六年にはリチャード、ヒュートン、サンソンが入獄した。戦後、『ウォーコメンタリ』誌は『フリーダム』と改名して、ヴェノン・リチャードの編集で週刊紙になったのである。また新らしく理論誌としては『アナキー』が一九六一年に創刊され一九七一年まで続いた。そしてコーリン・ウアードが退いて、『アナキー』誌は別のグループへ移った。一九六六年、ヴェノン・リチャードが編集を辞し、編集局委員会ができた。これに私（ジャック・ロビンソン）ピーター・ターナーが属し現在も残っている。時々、他のメンバーと協働し、外国人メンバー『クロード』誌とも連携したことがある。けれど自立して居り、八運動によって、管理されたことはない。各メンバーは投票権をもち、編集子は無給だ。他のスタッフもヴォランタリーで費用だけは払わされている。ご他聞に洩れず、我々の出版活動も製作費の値上りと読者数の落ちこみに見舞われている。けれどこれは他の左翼出版物と同じだろう。フリーダム社では別にアナキストの本、パンフ等を販売している……。

運動が高揚している際の『フリーダム』は活動家達から趣味的集団ときめつけられ、ヒッピーに活字架をひっくり返されたこともある。そして沈滞の時は、なぜ前衛の役割を担わないかと非難される。昨年九月頃から連合を呼びかけていたが、それが英国アナキスト連合に結集し、『フリーダム』もその一翼を担い、新しく『ワイルド・キャット（山猫）』誌ができることになった。その呼びかけによると各地の運動体、個人から寄稿を受け、また活動

状況のリポート、主張等を受け付けるとの由である。六月現在、準備号は出た様子だが詳細は知らない。

私の記憶では『フリーダム』を記述したものでG・ウッドコック著『結晶精神』がある。G・オーウエルの伝記だが、『動物農園』出版のいきさつは興味深い。『フリーダム』は有能な人びとの寄稿を受け、参加があつて成りたっている。それがまた実務に励む活動家には物足りなく、サロンとか高踏派として非難を蒙る仕儀になる。

紙面構成はタブロイド四頁が建頁で、第一面は政治問題、I R Aとか総選挙を扱い、第二頁は文芸絵画批評、第三頁が読者の便より第四頁は相互扶助欄があつて、ここでは読者、アナキストの催物、機関誌紙の案内がでる。時に八頁建の特集をすると、全面にマフノだとかドウルチの業績などが紹介される。近頃は二、三週つづけてアーヴリッチのバックニン解説が載り有益だった。論客はリチャード・ヴェルノン、アーヴリッチ、N・ウォルター、ピーター・ニュエル、A・モイゼー、先述のジャック・ロビンソンあたりである。またフリーダム社扱いの他の機関誌では『ナンバー・ゼロ』『ブラック・フラッグ』『ワイルド・キャット』その他。

|| フリーダム社の現住所 ||

Freedom Press

84b Whitechapel High Street

London E1 England

" BUREAU OF PUBRIC
SECRETS "
KEN KNABB

日本の革命的アナキスト同志へ

ケン・ノブ

小溝 光・訳

『ビューロー・オブ・パブリック・シークレット』は、アナキストではなく情況主義者のグループであることを明らかにしておく。過去の諸革命は、さまざまな国家社会主義諸潮流の破壊的な結果を証明してみたが、同時にアナキズムの無力性をも証明したと我々は考える。我々は、国家との如何なる妥協にも、華々しき商品制度と闘う革命的グループ内の位階制、またそれを隠蔽しつつ、結局それによって替わろうとする評議会内の位階制にも反対する。しかしながら、アナキズムは今だにこうした制度に対し、単なる抽象的な敵であることから何ら脱却していない。それは何故かと言えば、即ち現代社会の把握と、一貫した革命的理論の構築、この二者に対する真剣な試みが欠落していることに他ならない。アナキストが持ち合わせる全てのものを言えば、多くの場合、"アナキー"と言うラベルに対する感傷的信心でしかない。この類いのアナキストらは厳しさには手のほどこし様がない程アレルギーであり、またその多くは自らの混乱と、ほんのさ

さいな実践行動さえ完遂できない無力さを見せびらかしてバレードしている様なものである。それを更に得意になっている連中は、もはや救い難い。

こうした連中は、諸々の敵に対して具体的制裁手段を持ったり、自らの活動をことさら他と区別し、前進させるために諸決定を断行したり（例えば、受動的追従者や傍観者をたたき出し）、極めて馬鹿げた失敗を抽象的な「反権威主義」と言うアビールによって正当化する。然り、彼らは他でもなくその挫折した信心だけを控えて、自滅していくに過ぎない。

「今、現在、我々が必要とするのは、至福千年説の集大成や過去の革命論集なんかではなく、現在の情報の相互交換と現在の経験、批判の相互作用」が不可欠であることに我々は全く同感である。そしてそれは大量の「イデオロギー」を一まとめにするが如き折衷的目的ではなく、より正確さへ、より鮮明さへ向けた、そして新たな革命運動における更にさらに首尾一貫した理論・運動の発展へ向けた、一つのステップとして位置づけられなければならない。

我々にとって、曖昧な共感しか共に持ち合わせない百人の「リバタリアン」よりも、我々の活動と意識的実践の一致をみる一人の日本の同志と連絡できれば、はるかに有益であろう。その意味で、我々の所在と共にこの通信を公表したつもりだ。当然の事だが、日本の革命者から連絡、出版物等を期待している。

労働者評議会の国際的団結力を永続せよ！

一九七四・三・十三 ケン・ノブ

△追伸△

日本の革命的同志へ、ガイ・デボルド著『すばらしき社会』から、アナキズムに関するコピーをここに送ります。

インターの最初の闘争勝利は、インター自身を、その内部になお残存する支配的イデオロギーの混乱した勢力関係から解き放った。が、間もなく遭遇した敗退と弾圧は、プロレタリア革命の二つの概念の間に於ける衝突を最前面に押し出した。この二つの概念は双方とも権威主義的側面を包摂しており、それによって労働者階級の意識的自己解放は遺棄されている。事実、マルクス主義者とバクーニン主義者とのものはや和解し難い衝突は、直ちに革命的社会の権力問題、そして今日の運動の組織問題に関連する両刃であり、互いの論敵の境地が変われば変わるほど、この両者は自らを背反させて行った。バクーニンは、官僚階級と最も物事を知り得る者、またはそう見なされる者による独裁・支配の再編を予見しつつ、国家権力主義の利用によって階級を消滅するといった幻想を論駁した。一方、経済的矛盾、そして労働者の民主的教育から不可分の成熟しつつある過程は、労働者国家の役割を労働者自身が客観的に進められるところの新たな社会諸関係の合法化という単なる位相に低減するだろう、と考えたマルクスは、バクーニンとその追従者を名指して、その陰謀者の権力主義を故意にインターの上部に置き、最も革命的あるいは革命的と自称する者の無責任な独裁を社会に強制せんとする、全く無茶な図を公式化するものと公然と非難した。

バクーニンは実際、次の様な展望の下に彼の追従者を募った。

——人民の嵐の真只中の不可視の追先案内人、我々はそれに向か

わねばならない。しかも可視権力を持たず、あらゆる連合の集团的独裁でもって。階級章も肩書きも、公権も無き独裁、だが素早く力強いのは、権力の一かけらも無いからであらう。

こうして労働者革命の二つのイデオロギーは、互いに部分的には真の批判を含みつつも史的概念の統一を見失い、イデオロギー的権威への確執によって相互に対立し合った。一方ではドイツ社会民主党、他方ではイベリア・アナキスト連盟の如き力強い組織が、各々のイデオロギーに希望を与えはしたが、何処においても、その結果は大きく異なったものではなかった。

プロレタリア革命のゴールを直ちに現在のものとして直視する事実は、すぐさま現実のアナキスト闘争（その個的変形によるアナキストぶりは一笑に付される）の偉大さと虚弱さとを明示せずにおかない。集産主義的アナキズムは近代階級闘争の史的概念の結論のみを専ら保持し、この結論の絶対的要請は、また、手段に対する故意の軽蔑へと形を変える。従って、その政治闘争に関する批判は抽象の域に留まる一方、その経済闘争の採用は、例えばゼネストや騒動が予想されている日の、ある地域にただ一つの暴動さえ起こればそれによって決定的な解決を実現できる、という幻想機能としてのみ、肯定される。アナキストは実現すべき理想が有る。アナキズムは今なお国家と階級を、即ち個々別々のイデオロギーの社会条件を否定するイデオロギーである。それはまさに、あらゆるものを同等と考へ、且つあらゆる史的邪説を排除する純粹自由思想である。あらゆる部分的願望を融合するこの観点には、アナキズムに生活総体のための現状拒否を代表しているというメリットを与えはしたが、特権的批判者としての専門化への道

とは無縁である。しかしながら、この融合はその実際の実現以前に、個々の無定見に依って無条件的に扱えられることで、アナキズムを非常に見えすいた矛盾（首尾一貫性の無い）として片付けられることもまた事実である。

アナキズムはあらゆる個別事実に於ける、前述の単一にして絶対的な結論を繰り返して述べ、且つ活用しさえすればよい。何故なら、この第一の結論はその最初から運動の全体的ゴールに一致していたからである。この故にバクーニンは一八七三年、彼がジュラ同盟を去る時、次の様に書いている。『過去九年間、世界がその救済のために必要とするより多くの量の思想がインター内部で展開されたが、そうした思想だけで救済できるというならば、私は新思想の発明を誰にでもチャレンジしよう。もはや思想の時代ではなく、事実と行為の時代である。この見解は、思想は実践化されねばならないという確信を、プロレタリアートの史的概念から防護していることは疑う余地がない。が、この一章句を実行するに適当な形態がすてに見出され、将来不変のものと当然視することに依って、今だ歴史的領域に取り残されているのが事実である。』

イデオロギー上の確執により、自らを労働者運動総体から明確に区別するアナキストは、また、イデオロギーの正当性をめぐる彼ら自身のこの内部分裂を再生し、彼ら自身のイデオロギーのプロパガンダと自衛の専門家やその他の、例えば、あれこれの決定的真実を反復競争する知的活動が増すに従って、およそ陳腐にみえる専門家らによって、あらゆるアナキスト組織を非公式に支配するための地勢を採る。決定の合意に対するイデオロギー的尊重

は、自由なスペシャリストらの構成による自由な（非支配的な）権力の場合、その組織内部に限っては、概して順調に行使されている。そして革命的アナキズムは、解放された人々から同様な手段によって得られる同様なタイプの合意を期待する。更に、現在の闘争における小グループの状況と、自由な諸個人の社会との間の異論を考慮に入れるのを拒否することは、スペインでの無数のアナキストの（規模の小さな、組織力の弱い）暴動が地域のレベルで制限され、つぶされて行ったことで明らかな様に、共同決定したその瞬間に、アナキスト内部での永久的分裂を助長してしまうことに他ならない。

いずれにせよ明らかに純正アナキズムによって抱かれた幻想は、イデオロギーとイデオロギーに由来する実践組織形態との真性を証明する即時的に完遂される革命の永続的な緊迫である。事実、アナキズムは一九三六年、社会革命に到達し、常にプロレタリア勢力の最先行する予兆であった。こうした状況の中で、しかしながら次の事に注目されよ！

全国規模の暴動の合図は、軍隊の宣戦布告によって止むなきものであったし、更にこの革命が未だ完遂されなかった初期段階には（最後の国際プロレタリア運動が既に退敗した一方で、外国からの強力な援助で支えられたスペイン半島を制圧するフランコ勢力の存在と、共和政体内のブルジョア勢力、あるいはその他の国家主義的労働者党の勢力の残存が、その主な理由である。組織化されたアナキスト運動は、自ら革命の部分的勝利を拡大、あるいはその勝利の防衛さえできない不能性を暴露した。そのよく知られた最高幹部らは、内乱を免れるただそれだけのために、革命を

つぶしたブルジョア国家の閣僚に、そして他はその人質となった。

△ 記録・A △

ベネズエラ・アルゼンチン・チリ

山本 安屯

△ ベネズエラ △

メキシコを九月にたち、私はベネズエラに向う。機関紙『RUTA』は、G氏が編集した後、イタリア人のF氏に渡される。そんな仕組みになっていた。アナキズム運動は、カラカス大学に、細々と生き続けている。けれど、ラテン・アメリカの状況の変化に迫いつているのだろうか、と疑問に思った。ゲリラ組織MIRは、もはや、人々の話題にのぼって来ない。カラカスの町は、車と人でいっぱいであった。そんな中で、一度、バス会社のストがあった。けどそれっきりだ。S君に私は町を案内され、貧富の差のひどさを目のあたりに見た。町をはずれると、貧民街が山肌にビッシとへばりついている。私は、ゲリラ等の反米反帝闘争が、なぜあれほど根深く、死を賭してまで彼らが闘う意味がわかる様な気がした。決して他人事ではない。日本のファッショ政権だって、同じ事を画策しているのだから、貧民街の中の数分間は、私に恐怖を与えた。憎悪むきだしの眼で、彼らは私をにらんでいた。

私は自分の階級を、はっきり教えられ、自分の出身階級を憎んだ。私は、これからのがれられぬ限り、自分から彼らの地平まで下りていくべきだと、痛感した。

なぜベネズエラのアナキストは、組織づくりをしないのか。おそらくこのタブーとも言うべき貧民街に根ざした闘争を、展開できないのではと思った。キューバ革命前後の反米反帝闘争は、ここベネズエラで活発であったし、世界的な学生運動が展開していた時、カラカス大学は、拠点となり得ていた。今は、チリ・クイター、ファショカいらい政権の誕生という、ラテン・アメリカ全域の右傾化の中で、ゲリラ組織は、共闘の姿勢を堅持している。市内に通じる道路には、防弾チョッキをつけた警官が、銃を胸にかかえて立っていた。それが、百メートル間隔で続いている。どこに行くにも身分証明書をもっていなければならなかった。農村に住むアナキストが町に出てきた時、会う機会があった。ひどい衛生事情、生活状況を話すのみで、運動のことになると、話はとぎれてしまった。

私自身が、ベネズエラの運動とどの辺で関われるのかつかめな
いまま、この国を巡り、アルゼンチンに向かった。

△アルゼンチン▽

九月二十七日、首都ブエノスアイレスは、朝霧の中、廃虚のよう
にたたずんでいた。あちこちの壁には、ペロン支持のポスター
が貼りめぐらされていた。市のはずれにあるアナキズム書籍店に
行き、私は編集者たちに会った。流動化している中で、彼らの運
動は、厳しい局面に立たされている。ペロンは、労働組合連合C

GTの書記長Lが暗殺されたのを皮切りに、ペロン主義者左派を
含んだすべての左翼を排除する教書を発表した。公けにピラミ
などではしない。T君に、運動全般について聞いてみた。組合
運動を昔から続けているFORAは健在で、いずれ、その人た
ちに会うことができた。プロテスタを発売している人には、FOR
Aの会合の席上、会う機会があった。その席で、日本の『リベ
ル』誌の内容を若干説明した後、日本の状況を知る限り、説
明した。

FORA、FLA（アルゼンチン・青年リバータリアン）等大
きな組織のメンバーは、地道な活動が続けている。他に、アナキ
ズム図書館運動とも言うべきのだろうか、集会場を兼ねた図
書館が建設されていた。C市にあったこの種の図書館が右派ペロ
ニストだと思われる連中に焼打ちされた後、B市に新しく建設さ
れた。

派手なとも言いか、ゲリラ組織ERPの、中には、アナキス
トグループが共闘を組んで、ペロン打倒を主軸に、ゲリラ戦を展
開している。私が会った一人A君は、ウルグアイでOPR33の活
動家であったが、亡命するはめになり、B市に來ている。OPR
33は、ツバマロスと共闘してゲリラ戦を行っていたが、路線の
違いから決裂し、独自に武力戦を起し、地方都市を数ヶ月にわ
たり占拠した。が、軍・警察の包囲の中、この蜂起は失敗し、O
PR33は消滅したと聞く。A君は、それに参加した後、この国へ
逃れてきた。ここで力を蓄積し、軍政権下にある祖国を解放す
るのだと言う。彼の弟とは、いずれ、チリで会うことができた。
弟もやはり、亡命者である。この国のアナキズム運動は各層にわ

たっていて、私を目覚めさせた。日本の運動に欠けるのは、武力戦でもって敵を倒す組織が存在しないからではないだろうか。

ウルグアイの刑務所には、六〇名以上のアナキストが捕われている。

アルゼンチンそして南米では、路線が違えども一致できる所では、共に闘うという気風があるように感じる。その点、ヨーロッパとは違うように思う。メキシコ・ベネズエラで運動らしい運動が感じられなかったのは、その辺の理由からかもしれない。例を二、三あげると、左派ペロン主義者に紹介したI君はアナキストであり、いっしょに車の中で、情勢を検討し合っていた。各党派に分裂している左翼は、なお一層分裂化を深めている。その中でも、話し合いが可能なのだ。

目抜き通りで学生デモが夜あった時、ゲリラ組織ERPの旗が、黒旗とも交じって、はためていた。にぎやかなデモであった。

チリで、戒厳令下のアナキスト諸氏に会った時、隣りにはツバマロスの諸氏が坐っていた。言い合いはすれども、同じ境遇故、話しは合う。この国の運動を注視していく必要があるだろう。

△チリ▽

入管で手続きを済ませた後、ガランとした空港から市内に向う。クーデター後の市内は、活気を取り戻し、人の行き来が激しい。アルゼンチンで知り合ったA君の弟の所にいく。大統領官廷に近い彼のアパートには、弾痕が生々しく残っていた。九月十一日、クーデターの日から三日間は外出禁止令が施かれ、出ていた者は射殺されるか、競技場内にらちされた。彼と仲間たちは室にいて、

官廷がそして工場街が、二空軍機で急襲されているのを聞いていた。彼らにとってこの地は、亡命としてあるので、再び安全な土地を目ざして、避難民としても各国に渡っているだろう。でも、ここにいる間に、二、三人の仲間は別の所に住んでいたが、連絡が途切れてしまった。バレてつかまったのかもしれない。というのは、ウルグアイ政府が、ICPOを通じて、政治犯を捕えるように要請していたからだ。チリで、私は活動家に会うことができず、又、状況として無理である。何万人も平気で殺されているのだから。そして、各地に逃亡した活動家が、次々と殺されていくのが新聞に載っていた。

チリを中心に、南米は、米帝による再編成が進行し、人民は苦しい状況に追いつめられている。

× × ×

〔訂正〕 前号の「フランスのアナキストたち」のなかで、ORA IIアナキスト革命組織の目的と原理を記載しましたが、これはフランスのORAとは異なる、同名のイギリスの組織のものであり、誤りを訂正するとともに、お詫いたします。

編集部

性とアナキズム 小川正夫評論集 六〇〇円（送料）

名古屋市昭和区小坂町二の一六 小川正夫遺稿集刊行会

山鹿泰治・人とその生涯 エスベラントとアナキズム

向井 孝著 六〇〇円（送料共）

東京都板橋区赤塚二の三五の九白樺ハウス一〇号 青蛾房
（いずれも本誌編集部でも取り扱っています）